

永井宏幸提出 学位申請論文（課程博士）

『中部日本弥生文化論』審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、四部構成をとる。

第一部研究の視座は、これまでの弥生時代を中心とする研究史を復習して、現在の到達点を示す。具体的には、吉田富夫の接触式文化という視点を改めて評価する。一方、後発の紅村弘は弥生土器の研究に偏向しがちの趨勢に対して、西から伝播して来た弥生を受容する、土着の集団の動向に視点を据えた独自の見解について、とりわけ「顕示論」を掲げる。つまり「美麗を誇示する」遠賀川の壺に対して「粗い条痕」系の壺に強固な「対立観念の顕示」を重視するのである。つ

まり条痕文系が、共同体としての象徴的意義をもつ「表現・模倣」であり、シンボルであったとする解釈に注目する。

第二部中部弥生土器の研究では、尾張平野の弥生土器をⅠ期からⅣ期に至る編年網を提示した上で、いくつかの課題に焦点を当てて具体的に検討する。その一つは、伊勢湾周辺地域の弥生土器に錯綜する土器群の中に見出される西日本からの搬入品およびその模倣品の出現から展開までの時期的な変化を追跡し、共存併行関係を明らかにして編年的な位置づけを与える。その二つは、西日本伝来の弥生土器を背景に地元の土器を分析する。まず縄文土器の系譜から発達、盛行した突帯紋系土器が弥生時代の中に埋没し、消滅していく過程を明らかにする。続いて登場した条痕紋系土器の成立の経緯を詳細に分析する。さらに東北地方の影響の下に盛行した浅鉢を主体とする浮線網状紋系土器のあり様を分析する。さらに、これら三系統の土器群に遠賀川系土器がどのように位置づけられるのか、とくに朝日遺跡Ⅰ期を詳細に検討しながら、出現から定着、展開を具体的にみる。今後

は、土器の胎土分析による産地同定の可能性を課題とする。その三つは、遠賀川系と在地の突帯紋系土器とが折衷して成立した深鉢・甕が代表する削痕遠賀川式土器が、煮炊具のみであることに注目し、中部高地に系譜をもつ三ツ井型深鉢との関係を明らかにした。一方、一風変わった赤焼遠賀川式土器と呼ばれていた一群を、三重県地域に発達した個性派であり、弥生文化成立期の動静の中に金剛坂式として位置づける。その四は、一遺跡における出土数は少数ながら広域に分布する大地系土器の編年と各地域間の交流を跡づける。

次にこうした基本器種の分析に続いて、東海地方を中心に発達した極めて特徴的な円窓付土器を取り上げ、その性格を検討する。中期後葉に突如出現し、周辺地域に若干の搬入品あるいは模倣品があるほか、遠く近畿地方にも認められる。一部に器表面に風化の痕跡をとどめるものがあり、墓地などに晒された状態にあったことを指摘する。

本論においては、土器研究が大きな比重を占めるが、新しい方法として、積極

的な印象材型抜きを利用した実体顕微鏡の観察を試みている。これまでの土器表面の圧痕から動植物を見つけ出す成果を得ているが、それを弥生土器の施文原体の同定に活用しようとするものである。結果、貝殻の殻頂部を用いた施文であることを確定した。

また、弥生土器は単なる容器や煮炊具としての用途にとどまらない。縄文時代以来製塩土器の存在が知られているが、新たに知多半島北西岸に分布する「烏帽子型深鉢」が、製塩に利用されていた可能性を指摘している。

第三部は、土器論とは異なる、文化論ともいべき分野への取り組みである。その一つが「伝達思考の道具」という独自の概念の提唱である。つまり、第一の道具（労働用具）と第二の道具（呪術・儀礼にかかわる道具）の二者を相互調整のとれた状態に保つ、ヤジロベイの支柱としての役割を果す機能を有するものとする。それこそがモノを対象とする考古学の範疇を超えた「コトバ」であるとする。コトバは文字を前提として有効に働くが、声文化としての「オラリテイ」に

注目する。文字・記号などは記録としてカタチに残るが、音声は、記憶の領域に残るにすぎない。たしかに、両方ともコミュニケーションとして、相互に移動し、伝達が可能であるが、音声は原則として直接的な対面を前提とし、第三者の介在余地が少なく、有効性に難がある。会話によって意思の疎通を保障する「コトバ」は、第一の道具と第二の道具にそれぞれ直接結びつき、その機能を発揮する。その点が第一の道具と第二の道具の共存を揺るぎないものとする。つまり「コトバ」こそが単なる道具を孤立させることなく、文化コンテクストの中に組み込まれ、意味をもつものである。換言すれば、道具が個体として、個人的な関係で完結するものではなく、集団、社会、文化の中で機能するものになるとする。

その二つが、空間認識の問題である。生活、活動の場をとり巻く空間を自然環境との関係から「風土論」、社会環境との関係から「土地柄」として対峙させ、考古学的見地からの遺跡論を「土地柄」として理解しようとする。土地柄は、その土地のもつ固有の性質で、へ土地の性格である。その土地柄こそがその場を

根拠とする人々の対応・適応の仕方を特色付ける。その特色の具体的な内容は遺跡の中の遺構と遺物に反映されており、遺構・遺物の状態や配置としてそれぞれの個性的な特色を表現されるとする。

また、自然の中の人間は、自らの生活・社会・空間を確保するが、このことは自然との一線を画することを意味する。その境界について、弥生集落を囲繞する溝、いわゆる環壕集落の意味を問う。つまり、環壕集落とは戦闘を予想する社会であって、防御としての機能が大方の研究者によって、支持されてきているが、むしろ敵対集団というよりも自然と対峙する姿勢をカタチで表現した人間の主体性を確認する機能と理解する。それ故、環壕が、壁の構築ではなく、文字通り、大地に刻み込むという行為の産物であるところに、象徴的な意識をみる。そこに縄文時代における記念物と同様の意味を読みとるのである。

終章に中部弥生研究への提言として、改めてこれまでの研究を掘り起こして、さらにいくつかの課題を組上にのせる。貝塚遺跡に対する考察はその一つである。

一見すると弥生時代が稲作中心と目されながらも、大規模な貝塚の存在から、その実体は豊富な海産物や骨角製品から縄文以来漁業と狩猟の伝統が途絶えることなく継続していたことを如実に物語ることを重視する。一方、大遺跡にもかかわらず水田跡の見つからないままの朝日遺跡における「都市型昆虫」の多量の出土は、池上曾根遺跡例などから議論されてきている「弥生都市」論ともかかわる可能性につながり、尾張平野のあり様についての重要な課題が提起される。

論文審査の結果の要旨

本論は、中部日本を対象とする弥生文化論である。論題は「中部日本弥生文化論」として、中部日本と銘打つものの、具体的には尾張地方を中心としている。内容においては、尾張地方にのみ局限するものではないが、タイトルからはより広域に及ぶ範囲がイメージされ、期待あるいは予想される内容にしっかりと重な

らない感じは否めない。たしかに、中部地方とは伊勢湾地域の突帯紋系土器より派生した条痕紋系土器様式の分布範囲とすると明言してはいる。が、それならなおのこと欲を承知でさらに言えば、弥生文化は先行の縄文に比べると米作り、金属器を保有する全く異なる文化であり、文化論の検討には、その点が十分考慮される必要がある。とくに東海地方の銅鐸などのあり方にも独自性が認められ、西方から東進する弥生文化との関係を物語る重要な鍵となる。こうした点を視野に入れた弥生文化全体の中での位置づけを概観する説明を前提とすべきであろう。もつと所論にぴたりと相応しい、然るべき論文題目が望まれるところでもある。

それはともかく、とくに尾張を舞台とする弥生文化の展開は、西からの文化と縄文以来の伝統的な東の文化の接触、融合地域にあって独特な動きを示している。それだけ複雑な様相を解明することは非常な困難を伴うのであり、容易なことではない。論者はその緒を土器の分析を手掛かりにすべく、取り組むところに特色がある。土器は日常生活の必需品として、大量に製作され、しかも粘土を材料と

することから、造形上地域色や時期的変遷の詳細をよく反映するという性質がある。それ故に土器のあり様を通して、文化の動態に接近する方法を執ったところに効果が期待されるのである。まさに中部弥生文化を土器論を土台として議論する妥当性が認められるのである。論文全体は、地に足のついた着実な検証の過程を良く伝えていて、堅実な成果を示している。換言すれば、いわゆる考古学的方法による弥生土器分析の緻密な作業を基礎として、まさに典型的な考古学的研究の模範を見る。たしかにその点が論文に華々しさを欠くこととなったが、一方では地道な議論の展開に説得力を生み出している。とりわけ、これまでの研究を涉猟し、今日にいたる関係論文の豊富な引用に良く示されている。まず手始めに当該地方の弥生土器編年の樹立を目指したことは、いわば本論に一貫する時間軸を与え、自ら所論に秩序づけることとなっている。だからこそ、西からの弥生文化の強力な伝来に対して、在地の集団が受容するあり様を解きほぐす緒を確実に掴むことを可能にしているのである。それは複雑な土器群のあり方に反映されてお

り、それらの土器様式をいちいち組上にのせて、当時の当該地域における縄文時代から弥生時代への移行期の実情を明らかにしている。

その視点が、接触期土器研究の四つの事例である。つまり、突帯紋系土器様式の最終型式である馬見塚式の再検討、突帯紋系土器様式から派生して成立する条痕紋系土器様式の成立、伊勢湾周辺を中心とした浮線紋系土器様式の分布、そして尾張平野を中心とした遠賀川系土器様式の検討によく示されている。その分析が緻密であることは、十分に認められるが、その緻密さが当該地域に展開した弥生文化の複雑な様相を難解にしているだけに、よりダイナミックに説明する工夫が欲しいものである。とは云条、その具体的な方法が直ちに浮かんで来ないのは、それだけの複雑な動向の現われでもある。

論者の独自の視点のもう一つは、異系統土器間の接触によって派生する折衷土器をめぐる評価である。三ツ井形深鉢が在来の晩期の粗製土器を遠賀川系土器との接触によって生成した「削痕遠賀川土器」として正当な意味を与えているのは、

重要な研究成果といえる。また、同様な視点から「金剛坂式土器」を馬見塚式土器の深鉢変容壺と遠賀川系土器の折衷土器様式として位置づけるのに成功している。

さらに、中部地方に広く分布する大地系土器のユニークな様式を通して、広域交流という新しい切り口による解釈を試みているのは土器編年を越えた地域間ネットワークという社会的課題に止揚し、今後のさらなる検討が期待される場所である。

円窓付土器の研究は、なかでもとくに力を傾注したテーマであるが、網羅的に集めたデータの分析に基づいて興味深い事実を見出している。尾張平野を中心に分布する中で、とくに朝日遺跡では、三百点以上の出土という他遺跡に比べて圧倒的多数を誇り、その特異な性格が示唆される。その朝日遺跡内の出土地点は固定せず、時期によって異なるが、墓域とその周辺に偏在し、ついで環壕に集中する傾向が認められるのである。ところが、朝日遺跡内で、より大規模な東西両

墓域からは出ておらず、遺跡の最終段階の現象であることがわかるのである。その円窓付土器を観察すると、焼成後に小孔が穿けられている例が六点あり、方形周溝墓の供献される細頸壺の底部付近に施される小孔の穿孔との共通性が窺われることに着目するのは新しい指摘である。また、完形品の器表面が剥離している、「風化痕」のみられる例は、墓に供献され、雨晒しの状態にあったのではないかという解釈は極めて興味深い。こうした風化痕からの考察は従来なかったものであり、円窓付土器の性格理解のための貴重な一石を投じてくれるものとして、高く評価される。

如上の土器にかかわる分析、考究とは別に、いわゆる文化論の試みがある。その中で、第三の道具としての「コトバ」に関する問題提起は刺激的であり、今後の展開が期待される。しかし、依然として第一、第二の道具と並んで鼎立されるべき第三の道具の概念についてさらなる理論武装が要求されねばならない。この克服が弥生文化研究と理解の新たな地平を拓いてくれるはずである。

また、弥生時代を特色づける環壕集落について、従来弥生時代とは戦争時代という考え方から導き出されたところの防御施設という解釈に異を唱える。そしてむしろ対人間関係ではなく、むしろ自然と対峙する世界観の現われであるとするのは、注目すべき独自の主張である。この戦闘用説のしがらみから脱した新しい仮説は評価される。しかしながら、戦闘施設ではないということが、直ちに自然との対峙の表現であると結論するだけではなく、他集団に対して自らの権威、力を誇る示威の施設としての意味、意義については一考が欲しいところである。

以上、いくつかの課題を残すものの、本論文提出者の永井宏幸は博士(歴史学)の学位を授与される資格を有するものと認められる。

平成二十三年二月十八日

主查	國學院大學大学院客員教授	小林達雄	印
副查	國學院大學教授	柳田康雄	印
副查	國學院大學栃木短期大學教授	小林青樹	印

永井宏幸 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士（歴史学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十二年十二月十六日

学力確認担当者

主査	國學院大學大学院客員教授	小林達雄	印
副査	國學院大學教授	柳田康雄	印
副査	國學院大學栃木短期大学教授	小林青樹	印